

仏教思想と人間教育

田 路 慧

「要 約」

元來釈尊は「人間の教師」と呼ばれるにふさわしい人であった。本論では、仏陀・釈尊の教説を哲学的人間学の観点から考察し、仏・如来を「完全なる人格の完成者」、仏道を「人格完成への道」、釈尊の教化活動を「人間教育」として把握することによって、初期仏教思想を基本に「人間教育」のあり方を解明し、現代における教育の混迷と荒廃に対処する一助を目指すことを目指した。以下、人間の教師としての釈尊、心の教育としての心清浄道、人間教育の原理と理想、道德律としての戒、自己の調御と確立、解脱と慈悲の体得実践、生きる力をつける教育、人間教育と教師などの主題の下に論述したものである。

「キーワード」心清浄、無明・渴愛、無常・無我、縁起の法、戒、

自己調御、解脱・涅槃、慈悲

はじめに

昨今の教育界の現状を見ると、その混乱と荒廃に暗澹たる思いを抱かざるをえない。その原因の一つは、教育が家畜の管理調教か受験ロボットの製造のようになって、「人間」が忘れ去られてしまったと

ころにあるのではなからうか。カントの言うように、人間は教育によってのみ人間と成る。本来教育は、人間による、人間のための、人間教育でなければならない。本論では「人間の教師」と呼ばれ、人間教育に大きな成果を上げてきた釈尊の教説を基に、人間教育のあり方について考察し、人間教育探究の一助にしたい。

哲学・倫理学あるいは人間学としての仏教

仏陀 Buddha とは「さとった人・正覚者」を意味するインド語であり、絶対者すなわち神ではない。釈尊は神の使者ではなく、神の啓示によって聖者となり仏教の開祖となったのではない。人間として生まれ育ち人並みに結婚し一子をもうけたが、実存的な人生問題に悩み続け、ついに二十九歳の時に出家したのである。

「スパッタヤ。私は二十九歳で善を求めて出家した。スパッタヤ。わたしは出家してから五十年余となった。正理と法の領域のみを歩んできた。これ以外には『道の人』なるものは存在しない。」

〔大般涅槃經〕五・二七

とあるように、釈尊は「善を求めて」出家し、時の精神的指導者を訪ね学び、さらに断食など厳しい苦行を行ったがさとりは得られず、ついに独座禪定によって「正理と法」をさとり、「道」を完成すな

わち「成道」して「正しくさとした人・正等覚者・仏陀」となったのである。釈尊三十五歳の時であった。以後八十歳までの四十五年間弟子たちの教育と、人々の教化救済に努めたのである。中村元氏の指摘の通り、釈尊は自分への崇拜や信仰、神格化を拒否し、仏教という宗教を開き教祖になるつもりなど全然なく、最後まで一人の人間、求道者としてその生涯を全うしたのであった。弟子たちも、釈尊のことを「友ゴータマ」「ブッダ」「大徳」「尊師 Dīpaṅga (先生)」「如来 taṭhāgata (完全な人格者)」「尊敬すべき人 arhatī」「具眼者」「人間の調御者(調御丈夫)」などと呼び神格化していない。

かくて仏教は宗教というよりも、真理をさとって人格を完成した人・仏陀の教えであり、人間が皆仏陀に成るための教えであり、さらに仏法(さとの内容である真理・法)についての教えである、即ち人間が最も人間らしい人間と成るための教えであるということができるのである。まさに仏教が哲学・倫理学あるいは人間学であるといわれるゆえんである。このことは釈尊の出家求道の動機を見ても明らかである。

「比丘たちよ、私はこのような幸せな生活のなかで、しばしば次のような思いにとらわれた。『普通の人たちは自分が若い、病み、死すべき身であり、若い病み死ぬことを超えることを知らないのに、他人が若い、病み、死ぬのを見て、自分のことは棚にあげて、忌み、嫌い、忌避しようとする。思えば私もまた若い、病み、死すべき身であり、若い病み死ぬことを免れることはできない。にもかかわらず、他の人々が若いさらばえ、病み衰え、死にゆくのを見て、厭い嫌い忌避しようとする。これは私としてふさわしいことではない』と。私がこのように考えたとき、私の青春の高ぶりを、健康の自負、生存の驕りはすっかり消滅してしまった。」

〔中阿含経〕 一一七「柔軟経」抄意識

このように釈尊の出家の動機は生・老・病・死という、人生そのものが包含する実存的な苦悩であった。生・老・病・死の問題は現代でもわれわれ人間にとって深刻な問題である。釈尊の出家の動機が人間にとって普遍的な実存的問題であったということが人間学としての仏教の普遍性をもたらしているということができよう。人間として人生において直面せざるを得ない根源的な問題に取り組み、人生いかに生きるべきか、自ら探求し解決する道を教え、その力を育てるのが人間の心の教育、人間教育の基本ではなからうか。

人間教育の教師としての釈尊

「友ゴータマよ、最勝なり。たとえば、倒れたるを起すがごとく、覆われたるを露わすがごとく、迷えるものに道を示すがごとく、あるいは、暗闇に灯火をもたらしして「眼ある者は見よ」というがごとく、かくのごとく、尊きゴータマは、さまざまの方便をもつて法を説きたもうた。」

〔相應部教典〕 一一・一八「ティンバルカ」など

これは多くの初期教典の結びにある言葉である。釈尊は一方的に説教をして、自説を「信じよ」と強制することはまったくなかった。常に「眼ある者は(自分の眼で)見よ」という説き方をしていて、自分の眼で見させ、自分の頭で考え納得させる方法をとっている。弟子たちは釈尊の言葉をとことん反芻し考え抜き、「専念專注」して、「自知自証自覚」し心から了解納得して、

「わが迷いの生涯はすでに終わった。清浄なる行はずでに成った。なすべきことはすでになした。このうえはもはや再びかかる迷いの生涯に入ることはない。」

〔相應部教典〕 一一・一七「アチューラ」など

と覚知するのである。これも多くの初期經典の最後にある定型句である。このように積尊の教育は人間としての自覚をもたらし、人間として生きる道を体得確信させる、まさに人間教育であったのである。

心の教育としての仏教

「諸々の悪をなさず、努めて多くの善を行ない、自ら自分の心を浄めること、これ諸仏の教えなり。」

〔諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教〕 【法句經】 一八三

「悪をなさず善を行う」ということは道德の基本であり目的である。仏教の特色は止悪作善の根拠として「自ら自分の心を浄めること」を掲げたところにある。汚れた心が悪や不幸をもたらし、浄らかな心が善と幸福を生み出すのは、普遍的な事実である。

「物事はすべて心を先とし、心を主とし、心より成る。人、もし汚れたる心もて語り、また行なえば、苦の彼に従うこと、車輪がそれを引く牛の足に従うがごとし。」

物事はすべて心を先とし、心を主とし、心より成る。人、もし浄らかなる心もて語り、また行なえば、衆の彼に従うこと、影の形を離れざるがごとし。 【同】 一一二

人間の人間たるゆえんは、環境にただ支配されるだけでなく、自ら自分自身と自分の置れた状況を否定し、改革創造する能力、すなわち「心（manas 自由意志）」をもった存在であるところにある。心ないし自由意志なくして人間は存立し得ない。自分と自分の関わる世界は自分の心によって作られ、成り立ち、支配される、とするの

が仏教の基本的な考え方である。従って今ここに与えられた自分とその環境・世界をどう受け止め、どう対処するかは、自分自身に拠るのである。この世界の善悪は人間各自の心の浄不浄によって生ずるのである。しかも自分の心を汚すのも浄くするのも自分自身の心なのである。

「自ら悪をなして自ら汚れ、自ら悪をなさずして自ら浄む。自分の浄・不浄は自分の責任である。人は他に依って浄められることはできない。」 【同】 一六五

積尊は人間教育の根源を自分の世界と人生の担い手としての人間各自の「心」の在り方におくのである。かくて「心の教育」こそ人間教育の基本となるものなのである。人間各自が自分の心の汚れを除き浄めることを目指し精進するのが「仏道（仏陀・人格完成への道）」であり、仏道へと導くのが人間教育である。では心の汚れとは何であろうか。

「修理せざるは家屋の汚れ、身なりを整えざるは容色の汚れ、努め励まざるは修行者の汚れなり。もの惜しみは施者の汚れ、もろもろの悪行はこの世にもまたかの世にも汚れなり。」

これらの汚れよりもさらに甚だしき汚れは無明であって、これこそ最大の汚れなり。修行者たちよ、この汚れを断ちて汚れ無き者となれ。 【同】 一四、一三三

「無明 avidya」とは「物事の真相があるがままに見ないこと（不如実知見）」で「愚痴 moha」とも呼ばれ、根源的な無智迷妄、さらには無智迷妄への執着をいうのである。

さらにこの無明を元に発動し、この世に諸悪と苦悩を生み出す原動力となるのが「渴愛 tanha」と呼ばれる利己的な激しい欲望・貪欲

ないし衝動である。無明を因とし渴愛を動力として諸悪の現出するさまを解明したのが十二支縁起説である〔相応部教典〕一一、一〔法説〕。無明と渴愛・貪欲とこれらに付着している憤怒・怨憎は人の心を汚す根本煩惱として「三毒」と呼ばれている。心の汚れとはまさにこの「三毒」であり、心を浄めるとはまさにこの三毒を浄化断滅することで、これこそ仏道の究極の理想なのである。

人間教育としての心清浄道

「すべての物事は無常なり（諸行無常）と、智慧によって観るとき、そのとき人は苦を離脱す。これぞ清浄に至る道なり。すべての物事は苦なり（一切皆苦）と、智慧によって観るとき、そのとき人は苦を離脱す。これぞ清浄に至る道なり。すべての物事は無我なり（諸法無我）と、智慧によって観るとき、そのとき人は苦を離脱す。これぞ清浄に至る道なり。」〔法句経〕二七七―九

「無常 anitya」とは、自分と世界のすべては絶えず生滅変化流転して止まることのないことをいう。人間にとつて無常の真理は「病・老・死」の事実をもつて体験される。

「この容色は衰え果て、病の巢であり、もろくも滅びる。腐敗のかたまりで破れてしまう。生命はついに死に帰着する。」

〔ウダーナヴァルガ〕一、三四

「私は若い」と思っている、死すべきものなる人間は、だれが自分の生命を当てるにできようか。若い人々も死んでいくのだ。男も女も、次から次へと……」

〔ウダーナヴァルガ〕一、八

われわれは自分が無常の身であることを無視して永遠であるかのように錯覚し、自分と自分のものに執着し渴望する。そこで我愛・我欲・我執・我慢の無明煩惱の虜となつて渴望や愛執に駆り立てられ、我がものとして獲得所有支配しようと狂奔する。しかし万事、否自分自身すら自分の思うようにはならない。かくて焦燥と怒りと憎悪と嫉妬に苛まれ身を焦がすことになる。ここに諸悪と苦悩と不幸の根本的原因があるのである。

「われらはここにあって死すべきものである」と覚悟しよう。（略）
このことわりを 知る人々があれば争いは静まる。」

〔法句経〕一六

「自分は死ぬものだ」「自分の生命は、はかなく短く、ただ一つ、一回きりで、二度とない」、この真理を心底より自覚することがより善い生への出発点である。「無常・死の教育」こそ人間教育の原点とならねばならない。「一切皆苦」とは人間存在そのもののあり方が「無常・老・死、苦」であることをいう。釈尊は諸悪と苦悩を克服するために先ずその現実をあるがままに観じ直視して、その根源の問題に取り組むことを強調する。

かくて、自心を浄めるためには、先ず「諸行無常」の真理に目覚め、自分自身も無常の身であり老い病み死すべき存在であることを直視し自覚しなければならぬ。自分と自分の関わるすべてのものが無常であれば、「我がもの」と執着し、永遠に所有しうるものはないものもなく、執着する当体である「我」そのものも絶対的ではなく、自分のなかに不変不滅の本質（我体・靈魂）のようなものも当然存在することはないのである。

「修行者たちよ、色（肉体・物質）は無常である。無常なれば、すなわち苦である。苦なれば、すなわち無我である。無我なれば、

すなわち、こは我所（我がもの）にあらず、こは我（我そのもの）にあらず。こは我体（我の本質）にあらず。かくのごとく正しい智慧をもって如実に観ずべし。」

〔相応部經典〕二二、四五 「無常」一

自我は五蘊仮和合すなわち色（肉体・物質）受（感覚）想（表象）行（意志）識（意識）の五つの要素が仮に結合して存在しているのであるが、その構成要素のそれぞれがすべて無常にして苦・無我なのである。従って自我もかりそめの実体のないものに過ぎない。ところがわれわれはこの無我の実相に目をそむけ、自分を絶対化し全能感に捕らわれ、万事自分の思うがままに支配せんと我を張る。かくして我欲・我執・我慢と利己主義は増大し、思うようにならないという苦悩と苛立ちと怒りと憎悪が心を充たし、悪行へと駆り立てる。自我の実相への無明と渴愛、自我絶対化こそあらゆる諸悪の源泉なのである。

「『これは自分の子らである』「これは自分の財産である」と、凡愚は思い煩う。自分さえ自分のものではない。どうして子らが自分のものであろうか。どうして財産が自分のものであろうか。」

〔法句経〕 六二

かくて、自分と自分の関わる世界のすべての真相は「無常にして苦・無我」なることを深く自覚し、その真理に基づいて考え・話し・行動することこそ、われわれが自分の心を浄め苦悩を解脱し、諸悪を滅尽し、安らかに生活しうる道なのである。

「この身は水泡のごとしと知り、陽炎のごとしと深く自覚している人は、悪魔の甘い誘いを退け、死王に出会うことはないであろう。」

〔同〕 四六

「歡喜に満ちて仏陀の教えを信じ悦ぶ修行者は、はからい（行）の止みたる安らからで幸せな寂浄の境地に達するであろう。」

〔涅槃寂浄〕 〔同〕 三八二

一般的には、「無常・苦・無我」というと衰滅あるいは虚無といった否定的な面が着目され、むなしいはかないという虚無感や厭世感ばかりが強調されがちである。無常には当然、生・成・創・栄・盛という肯定的な面もある。衰滅があれば生成があり、安樂も過ぎ去れば苦悩と逆境もまた過ぎ去るのである。静的・固定的な見方を廃し「動的・多面的な見方」をするのが無常観である。また「無我」というのも「我というものが存在しない」というのではなく、自我あるいは物事を実体視しあるいは絶対化しない、固定的・一面的・孤立的に把握しないというものの見方考え方を表すもので、決して存在の虚無を説くものではない。要するに積尊は自分や物事を固定化・絶対化せずに、無常・無我の相に於て他との関係性の中で動的、多面的、総合的に認識把握すべきことを説いているのである。

人間教育の原理―縁起の法

無常・無我の理法の根柢は「縁起の法」と呼ばれる存在の真理である。

「修行者たちよ。縁起とはどのようなことであらうか。たとえ生があるから老死があるのである。このことは私がこの世に出ようと思いと決まっていることである。法として定まり、確立していることである。その内容は相依性である。それを私は覚ったのだ。覚つて、今、君たちに教え示し、説明して、『君たちも見よ』と言っているのである。」

〔相応部經典〕 一一、二〇「縁」

「積尊の菩提樹下での正覚の内容はまさに「縁起」であった。従って仏教はこの「縁起」を原点として成立したのである。「縁起」は積尊がこの世に出ようと出まいと法として存在し確定しているので「縁起の法」と呼ばれる。そしてその内容は「相依性」即ちすべての物事・現象は種々の原因や条件に「縁って起こった」ものであり、「相互に依存し合い関係し合って成立している」ということを意味している。このことを積尊の高弟で智慧第一といわれたシャーリプトラ（舍利弗）は次のように説明している。

「友よ、例えば、ここに二つの葦束があるとしよう。それら二つの葦束は、相依しているとき、立っていることができる。それと同じように、これがあるからかれがあるのであり、かれがあるからこれがあるのである。だが、もし二つの葦束のうち、一つの葦束を取り去れば、他の葦束も倒れるであろう。それと同じく、これがなければかれはないのであり、かれがなければこれもまたないのである。」〔同〕一一一、六七「葦束」

このように一切の物事は縁生即ち条件に縁って生じたものであるから、条件によって変化流動し、条件がなくなれば消滅する、即ち無常なるものなのであり、様々の因や縁が相互に依り関係し合ってたまたま生起し存在しているのであるから、何らそれ自体としての独立性、固定性、永遠性、絶対性をもたず、常一主宰の絶対者（実体）のようなものではない、即ち無我なのである。無常無我の道理は縁起の法の実践的表現なのである。

「縁起の法」は存在の真理として、次のような公式をもつて表されている。

「これあればかれあり、これ生ずればかれ生ず。これなければかれなく、これ滅すれば、かれ滅す。」

〔小部経典〕「自説経」 一一一、二など
積尊は縁起の法に則り諸悪と苦悩の原因を探究する。そして無明に到達したのである。

「どのような苦しみも、すべて無明に縁って生ずるのである。しかしながら、無明を残りなく離れ止滅するならば、苦しみの生ずることはない。」〔経集〕 三二、二二

先述の「無明」とは、明が無いこと、真理を観ないこと即ち縁起の法、無常無我の道理に無知無自覚なることである。この根源的な無智から邪見、邪思惟、邪欲、渴愛が発動し、一切の諸悪と苦悩が惹起するのである。かくて縁起の法・無常無我の道理を覚り、無明を滅尽して心を浄め、苦悩から解脱して涅槃に至るのが仏教の目標となるのである。

「たとい百歳まで生きるとも、『生と滅』を観ざれば、一日生きて『生と滅』を観るにしかず。」〔法句経〕 一一三

縁起の法を覚り、智慧によって心の汚れを洗い浄め、煩惱の炎を吹き消して、諸悪を離脱し苦悩を克服した自由な安らぎと喜びの境地を、積尊は「涅槃 nibbana」と呼び、人生の最高の理想としたのである。そして自ら縁起を覚り、心を浄め涅槃を体得して仏陀となった積尊は、「君たちも観よ」と人々に呼びかけているのである。「私は絶対だ。私の教えを信じ、従え」と、信仰や崇拜を強制しないと、人間として生きる力を育てる教育

― 四諦八正道（人生問題対処法）

われわれは生きていく過程でさまざまな人生問題に直面し、挫折や不安や苦悩、憂鬱や悲哀にさらされる。人生問題に如何に取組み、不安や苦悩、絶望にどのように対処するか、を教え身につけさせることは、たくましく生きる力をつけるための教育の最も重要な課題であろう。釈尊が人生問題対処法として説いたのが「四諦八正道」の教えである。

「人々は恐怖に駆られて、山や森や園や祠など多くのものを依り所としようとす。しかしそれらは安穩なる依り所ではなく、最上の依り所ではない。こうした依り所に頼つても、あらゆる苦悩からのがれることはできない。」

仏陀と法と僧伽を依り所とし、それによつて四つの聖なる真理、即ち、苦と、苦の起と、苦の滅と、苦滅に至る八つの正しき道を、明らかな智慧をもつて観ずるならば、これこそ安穩なる依り所であり、最上の依り所である。この依り所に依れば、あらゆる苦悩を克服することができる。」

釈尊はまず「仏陀（目覚めた人・尊師）」と「法（真理の教え）」と「僧伽（その教えのもとに和合団結した仲間たち・善き友・親友）」を依り所とすることを勧める。仏教では仏陀と法と僧伽は人生における三つの宝として「三宝」と呼ばれ、われわれの最も尊重し帰依すべきものとされている。しかし自分の人生問題を背負い解決克服するのはやはり自分自身以外にはない。「四諦八正道」の教えこそ、自分自身の力で人生苦を解決克服する心構えと方法を説いたものである。

「四諦（四つの真理）」の教えは医師による病気の治療法と同じく非常に具体的合理的である。まず「苦」という真理は、苦悩の現実を冷静に直視して現実があるがままに具体的に把握すべきことを説くものである。「苦の起（漢訳・集）」という真理は、苦悩の現実も

縁起したものであるから、その縁つて起こつた原因と条件を究明把握すべきことを説くものである。釈尊はあらゆる苦悩の原因は無明に基づく「渴愛（衝動・妄執）」にあると見なしている。「滅」という真理は、自分の目指す目標を明確にし、苦悩の原因や条件を減する見通しを立てるべきことをいう。見通しを立てずやみくもに努力しても解決せずかえつて混乱するだけである。「道」という真理は、問題解決のために具体的に実践すべき「正見（正しいものの見方）」「正思（正しいものの考え方）」「正語（正しい言葉）」「正業（正しい行為）」「正命（正しい生活）」「正精進（正しい努力）」「正念（正しい専念）」「正定（正しい心の集中統一）」の八つの正しい人生苦を克服する方法を説くものであり、それはまた人間らしい正しい人生の生き方を指し示すものでもある。

「苦の聖諦とはこれである。いわく、生は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。怨み憎むものと会うのは苦である（怨憎会苦）。愛するものと別れ離れるのも苦である（愛別離苦）。求めるものが得られないのは苦である（求不得苦）。要するに欲望のかたまりである心身の有り様は苦である（五蘊盛苦）。苦の起の聖諦はこれである。再び迷いの生存をもたらし、喜びと貪りをともない、いたるところに執して快樂を求める渴愛がこれである。それは即ち享樂的満足を求める渴愛と、生存をむさばる渴愛と、生存の滅無を望む渴愛である。

苦の滅の聖諦はこれである。即ちこの渴愛を余すところなく離れ滅し、捨て去り、解脱して、無執着となることである。

苦滅に至る道の聖諦はこれである。それは八つの部分よりなる聖なる道である。即ち正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。」

（『転法輪経』）

釈尊はこの八正道を自ら実践して苦悩を解脱し涅槃を得て仏陀と

なつたのである。そして釈尊の最初の説法がまさしくこの「四諦八正道」であつたのである。

「もろもろの道のなかでは、八つの部分よりなる正しい道が最も優れ、もろもろの真理のなかでは四つの句（四諦）が最も優れ、もろもろの徳のなかでは貪りを離れることが最も優れ、人々のなかでは眼ある人（仏陀）が最も優れている。

これこそ知見を淨むる道である。このほかに道はない。君たちはこの道を進み行くがよい。これこそ悪魔の誘惑を打ち破るものである。君たちがこの道を進み行くならばまさに苦を克服するであろう。私はすでに苦の矢の除滅することを知つて、君たちがこの道を説くのである。」

〔法句経〕 二七三―五

まさに八正道こそ人間教育の、人間らしい生活の基盤となるものである。

人間として守るべき規範 ― 仏教の道徳律

われわれの心のなかには理想に向かつて邁進するよりも、努力しないで困難を避け甘い生活を期待するなまけ心が潜んでおり、目先の安楽を求め気ままで怠惰なしたいほうだいの生活にのめり込んでいく根強い傾向がある。この自分のなかにある気まま勝手のなまけ心・放逸懈怠の心こそわれわれの最大の敵なのである。

「修行者たちよ。心を定めよ。放逸になることなかれ。心を愛欲に住せざれ。放逸に過ごして、真つ赤に焼けた鉄丸を飲むことなかれ。焼かるる時になつて『ああ、苦しい』と叫ぶことなかれ。」

〔同〕 三七一

われわれは今、この時を、理想に向かつて努め励む時、生は充足

し、死を超越する。不放逸を悦び、努力することを楽しむ境地が「涅槃」なのである。釈尊の最後の言葉も「すべてのものはうつろいゆく。不放逸にして努力せよ」（『大般涅槃経』）であつた。

われわれが放逸懈怠に陥るのを防ぎ目標に向かつて前進させる力となる自律的な決意が「戒」である。「戒（Sīla）」は「淨戒」ともいわれ「よい習慣」「善い性格」の語義をもち、われわれが自発的に身につけるべき生活の規則、道徳的規範を意味している。厳しい自律自制による規範の遵守、善き習慣・善き性格の形成こそ、道徳の基本であり、心を淨め、幸せな人生をおくる基礎なのである。釈尊は一般の社会人の守るべき規範・戒として「不殺生」「不偷盜」「不妄語」「不邪淫」「不飲酒」の五つの戒を定めている。

「人、もし、生けるものを殺害し、嘘（妄語）を語り、世間において与えられないものを取り（偷盜）、他人の妻を犯し（邪淫）、穀酒や果実酒に耽り溺れるならば、それはこの世においてすでに自分の根を握るものなり。」

〔法句経〕 二四六―七

また月四回の「布薩日（反省と懺悔の日）」に仏教信者の守るべき戒として五戒に「装身化粧を止め、歌舞を聴視しない」「寝台に寝ない」「昼食以後食事をしない」の三つを加えた「八齋戒」も定められている。さらに身体に於て守るべき戒として「不殺生」「不偷盜」「不邪淫」、口において守るべき戒として「不妄語」「不両舌」「不惡口」「不綺語」、心において守るべき戒として「不貪欲」「不瞋恚」「不見」の十の戒が挙げられ「十善戒」と呼ばれている（『増支部経典』『十悪と十善』）。これらの戒の「不」を取ればすべて放逸懈怠の人の陥りやすい悪である。戒こそ具体的な道徳的善悪の基準をなすものである。人間教育はまず生活の規範を自ら遵守する訓練から始めるべきであろう。

自己の探究・調御・確立 ― 自主自律独立自尊の人格の確立

われわれ人間は全能感に捕らわれ自我を絶対化する根強い性向を持つが、同時に自分ほど頼りないはかないものはないことも無意識に了解しており、常に抛り所のなさ、根源的な不安にさらされている。そこで、自己以外のもの、学歴や財物や地位や名声や権力にしがみついたり、絶対的な救済者を求めてすがりつこうとしたり、はては酒や享楽によってまぎらわそうとする。しかし自分の不安や苦悩を解決しうるのは自分自身のみであった。自己以外のものを自分の主人となし抛り所として、それに依存することによって不安や苦悩から逃れようとするところに根本的な問題があるのである。われわれはまず自分自身の実相を知ることから始めるべきである。釈尊も自己の探究を強調する。われを忘れて遊んでいるうちに、金目の物を持って逃げた女を夢中で捜している若者たちに釈尊は言う。

「若者たちよ、逃げた女を探し求めることと、自分自身を探し求めることと、どちらが大切であろうか。」

〔律蔵〕 小品 一、一四

われわれも眼を自分自身の内に向け、自分の内なる自己を探究把握、調御確立して、自分が自分の主人となる、すなはち自由人（自在者）となることを目指すべきである。

「自己こそ自分の主なり。他に何ぞ主あらんや。自己をよく調御したならば、人は得難き主を得るなり。」〔法句経〕 一六〇
「まことに自己こそ自分の主であり、自己こそ自分の依り所である。されば自己を調御せよ。馬商人が良馬を調教するように。」

〔同〕 三八〇

「主 natha」は保護者や本尊の語義ももつ。釈尊は自己こそ自分の

主であり保護者であり本尊であるから、人間は他に依存することなく自己を尊重し、自己に帰依せよと説き、人間の自由と尊厳を強調する。自分の内なる自己を自ら探究啓発育成確立して、自己と自分を和合統一していくことがわれわれ人間の課題である。かくして自分の内なる調御確立された自己こそ自分の真の主となり真の依り所となりうるのである。そして自分が完全に自己自身に由るとき、真に自由な自己そのものである「自在人（自由人）」すなはち仏陀・如来（自立の人格を完成した人間）となるのである。

このように児童生徒が自分を自ら主として帰依するにたる自己（人格）へと調御確立していくことが、人間教育の、就中道徳教育の理想なのである。しかし、それは厳しい自省と自己吟味による、自分と闘い、自分に打ち勝つ孤独な自己闘争の道である。

「人、もし、自分を愛すべきものと知るならば、自分をよく守れ。

心ある者は夜分の三分の一は目醒めていて自らを省みるべし。」

〔同〕 一五七

「修行者たちよ。自ら自分を叱り、自ら自分を吟味せよ。こうして自分を守り、正しい念いをたもつ者は、安らかに暮すであろう。」

〔同〕 二七九

「戦場において百万の敵に打ち勝つよりも、一人の自分に打ち勝つ者こそ最高の勝利者である。他の人々に勝つよりも、自分自身に勝つほうが優れている。常に自分を調御し、行なうところ常に節度ある人の勝利には、神も鬼神も梵天も魔王も反撃することはできない。」

〔同〕 一〇三・一〇五

自ら自分に打ち勝ち、自ら自分の主となつて、常に自分を調御確立して他への依存心を捨て去り、すべての束縛から解脱するとき、自主自律独立自尊の最高に自由で安らかな境地（涅槃）が開けてくる。八正道はまさにかかる自己の調御確立の道なのである。

このような自己確立の教えは先述の無我の教えと一見矛盾するように見えるであろう。しかし無我の教えは現象的な自我を實體視し絶対化して、自分が世界の支配者であるかのように思い上がり、我愛我見我執我欲我慢の煩惱のとりことなることを否定したもの、即ち誤った自我観を否定するものであり、自己が存在しないことを説くものではないのである。それは後世に「小我を捨て大我に生きる」などといわれるように、小我・現象我の絶対化を否定して、我見我執我慢を打破し、自我の真実の姿に目覚めるべきことをいうのである。即ち自分は様々の因や縁によって生れた無常の存在であって、相依相資の縁起的関係のなかで生かされている一つの存在であること、換言すれば自然・人類・国家社会・家族・友人などの世界や環境のなかに生れ、それらによって共に生かされている存在であることに目覚め、その世界の環境のなかに自分を正しく位置づけ、皆共に生を全うすべきことを深く自覚することを意味するのである。このように自己の真実に目覚めた自分を仏陀というのである。そして人は皆このような自覚の可能性、即ち「仏種子（仏性）」を本来内蔵しているのである。この仏性こそ自分の内なる自己なのである。さらにかかる縁起的世界の真実こそ「法」と呼ばれるものであり、この法を求め、法に導かれ、法と共に生きることが仏道であり八正道であった。かくして法と一体となった自己こそ「如来」であり、真の自分の主であり、帰依所なのである。釈尊の遺誡はまさに「自帰依、法帰依」を説くものであった。

「汝ら、自己を鳥とし、自己を依り所として、他を依り所となすことなかれ。法を鳥とし、法を依り所として、他を依り所となすことなかれ」
 【大般涅槃經】

このように心清浄の道は、内なる仏性の開発、自己の調御確立、人格完成の人間教育に帰着するのである。

人間教育の理想 ― 解脱・涅槃（こころの自由と安らぎ）

真理に目覚め自己を調御確立して、悪徳と苦悩の連鎖である輪廻の束縛から自己を解き放ちて解脱し、自由と安らぎの至福の境地・涅槃を得ることが仏道の究極の理想であった。ここでは仏道あるいは人間の理想である「解脱・涅槃」について考察したい。

「解脱 moka」は「解放・救出・自由・自在」の語義をもつ。心が無明煩惱から、我執我欲から、従属や依存状態から、束縛や強制から、一切世間から、悪魔から、苦悩や不安や恐怖から、現世や来世から、輪廻転生から、要するにすべてから離脱・超越・脱出・解放して、なにもものにもこだわらず捕らわれることなく自由自在となることである。自由自在の境地は、自由意志をもつわれわれ人間の最大の願望である。このように心をかき乱し焼き焦がす煩惱の炎の吹き消えた自由と安らぎの境地が「涅槃 nibbana」と呼ばれるのである。解脱の目的は涅槃にあり、通常解脱して涅槃に入ると表現されるが、解脱涅槃とまとめて表されることも多いように、解脱即涅槃と解するのが妥当であろう。涅槃は安らぎ・幸い・不死・無為・彼岸・清浄・滅・寂滅として「さとり」など多くの訳語があるように、言葉ではなかなか表現し難い体験的真理を表す概念であるが、現代的には純粋な自由と至福の境地と解してもよいであろう。

「前を捨てよ。後を捨てよ。中間を捨てよ。生存の彼岸に達した人は、あらゆる事柄から心が解脱していて、もはや生まれと老いとを受けることはない。」
 【法句經】 三二四八

「彼岸もなく、此岸もなく、彼岸・此岸なるものもなく、恐れもなく、束縛もない人、かれをわれは聖者と呼ぶ。」
 【同】 三二六七

「輪廻転生解脱して、調御の地位を体得す。これぞ世間の勝者なり。」
 【相應部經典】 七六、四

解脱涅槃は信仰によってではなく、あくまでも「正しい思惟と正しい努力」によって、縁起の法、無常・無我の道理の自覚、四諦八正道の実践によって「この世において、今、現に」達成体得確信できるものなのである。

解脱涅槃の境地は具体的に次のように説明されている。

「普通の人々は病気になるたりして苦悩を感じれば、嘆き悲しみ悶え心も狂乱する。彼は身体の苦しみと心の苦しみと二重の苦しみを感じて、あたかも第一の矢で射られたうえさらに第二の矢で射られたようなものである。しかし私の教えを聞いた弟子たちは、苦悩を感じても、悲しみ悶えることなく心も狂乱することはない。身における苦しみは感受しても、心には感受することはない。それはあたかも第一の矢は受けても、第二の矢は受けなかったようなものである。そのわけは私の弟子たちは苦の生起と滅尽、苦を克服する道を知っており、苦によって支配束縛されることはないからである。」（「同」 三六、六「矢」抄意訳）

このように解脱涅槃とは逆境に陥り身に苦を受けても心までおかさね捕らわれかき乱されることのない境地、例えば身体は病気になるてもそれに捕らわれふりまわされることのない自由な心の状態のことをいうのである。心が健康で自由であれば、われわれは冷静に状況に対処し、解決を目指すことができるのである。この心の自由と平安こそ人間教育のもたらす最大の効能であろう。これこそ今子どもたちに最も欠けているものなのである。

「他に従属することはすべて苦しみであり、自由たることは、すべて楽しみである。」（「自説経」 一一、九）

「よく自分を制し、淨らかな行いを修め、四つのまことの真理を

覚りて、ついに涅槃を実現することを得れば、人間の幸福はこれに勝るものはない。」（「経集」 二一四）

「たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満たされることはない。欲望の快樂の味は短く苦いものだ、賢者は知って、天上の快樂にさえ心樂しむことはない。正しく覚った人の弟子は渴愛の滅尽を樂しむ。」（「法句経」 一八六〜七）

際限のないエゴの拡大と欲望の追求によって、人々が財物、学歴、名声、権力、そして欲望と快樂の奴隷となり、まさに競争と闘争の修羅場と化した現代社会において、これらの積尊の教えは特に重要であり、自我の調御と欲望の制御こそわれわれ現代人にとって最も必要なことであり、人間教育の基本となるべきことではなからうか。

「世にあつて情欲を離れ、諸々の欲望を超えているのは楽しい。おれが、おれが、という慢心を押えよ。これこそ最上の安樂である。」（「ウダーナヴァルガ」三〇、一九）

人間教育の究極の目的 ― 生命の尊重と慈悲の体得

仏教の究極の目的は生命の尊重と慈悲心の体得実践である。同じく人間教育、就中道徳教育の究極の課題も、一切の生命を尊重し、相互に助け合う愛ないし慈悲の心の体得と実践である。解脱涅槃を得て自己の幸福を達成した後、なすべきことは生きとし生けるもののために活動することである。釈尊も人々の「安樂と利益のために」法を説き、世の幸福と利益のために弟子たちを各地に派遣したのである。

「よく教えの道理を会得した者が、涅槃の境地を得た後なすべきことはこれなり。」

有能、率直、端正なること、善き言葉を語り、柔和にして、高

慢ならざること。(略)

ただかかる慈しみをのみ修すべし。生きとし生けるものうえに、幸いあれ、平和あれ、安楽あれと。あたかも母たる者がそのひとり子を、いのちを賭して護るがごとく、生きとし生けるものうえに、かぎりなく慈しみの思いをそそげ。また一切世間のうえに、かぎりなき慈しみの思いをそそげ。」

〔経集〕一、八〔慈經〕

慈悲の心は生あるものに暴力をふるわず、殺さず、殺さしめない、という決意を生む。

「すべてのものは暴力に怯え、死を恐れる。自分の身に引き比べて、殺すなかれ、殺さしむるなかれ。すべてのものは暴力を恐れる。生こそすべてのものの愛するところ自分の身に引き比べて、殺すなかれ殺さしむるなかれ。」〔法句經〕一一九―三〇〇
「強いものであれ、弱いものであれ、生きものに対して暴力をふるうことなく、殺さず、また殺させることのない人、かれをわれは高貴なる人と呼ぶ。」〔同〕四〇五

人間には肉体的な暴力や殺害だけでなく、精神的な生命に対する暴力や傷害もある。言葉による精神的な暴力や傷害にもわれわれは充分に注意をはらわねばならない。特に親や教師は留意、自戒すべきである。服従と暗記を強制し、子どもたちの興味と意志と思考力を無視抑圧することは精神的暴力、精神的傷害でなくてなんであろうか。

人間教育の方法 ― 対話・坐禅・憶念

釈尊が教育に用いた方法は、説法、問答法、坐禅や瞑想、内観、仏陀や仏法や善き仲間の憶念などがあるが、特に弟子たちの教育には問答法が用いられている。一般の信者たちにも、一方的に自説を説くの

ではなく、問いかけ、自ら考え、答を見出すように導く方法が多く取られている。対話・問答法こそ教師と生徒の心を結び育む最善の方法である。

「ソーナよ、そなたはいかに思うか。色は常であろうか、無常であろうか」「大徳よ、無常であります」「もし無常ならば、それは苦であろうか、楽であろうか」「大徳よ、苦であります」「もし無常・苦にして、移ろい変わるものならば、これを観じて、こはわが物である、こはわが我である、これはわが本体であるとすることは妥当であろうか」「大徳よ、そうではありません」

〔相應部經典〕一三二、四九〔ソーナ〕

また弟子の方から質問をすることも多い。

「大徳よ、魔羅、魔羅とよく言われますが、魔羅とはいったいなんですか」「ラーダよ、色(受・想・行・識)があれば、そこに魔羅がある。殺すものがありまた死するものがあるであろう。だから色を魔羅であると観じ、(略)」〔同〕一三三、一〔魔〕

講義(説法)が終われば、弟子たちは釈尊の教えを憶念し、独り坐禅して自ら静慮思考して法を理解し体得するように勤めるのである。また弟子たちはいつも「気をつけて」いて「昼も夜も常に仏と法、老死や不傷害を憶念し」、真理の体得と人格の完成を目指すのである。

〔法句經〕一一九六―九

さらに「布薩(説戒)」といって半月に一度同じ地域の修行者たちが集まって戒本を誦し、互いに反省し、懺悔する会がもたれた。釈尊は、対機説法といわれるように、相手の機根に応じ、実によく相手の立場や心の状態を観察し、気持ちをよく察し理解したうえで、巧みな比喩や例え話をもって語りかけ、自ら考え自覚し問題を解決するよう

に、時と場を踏まえて適切に教え諭し、指導し助言している。まさに「偉大なる人間の御者」、人間の、そして人生の教師、あるいは尊師と呼ばれるに値する人であった。

心の教育においては特に「対話、質疑応答、討論」は重要である。また静坐ないし坐禅、静かに沈思熟考する時間、自省・内観する時間を教育に早期から取り入れるべきではなからうか。教育においては教師の人間性と共に、教授法の研究が不可欠である。

人間教育と教師 一師たるものの心構え

教育の対象は物や家畜ではなく、心をもった人間である。児童生徒の心、感情や知性や意志を無視して、動物を調教するように扱ったり、物を加工するように機械的に管理し処理すれば、反抗しゆがみ混乱するのは当然である。心を教育しうるのは心のみである。ここに教育という仕事が他の労働と異なる所以がある。まず教育に携わる者が温かい血の通った心の持ち主でなければならない。何よりも教師たる者の心の自覚が望まれる。

「まず自ら自分を調御し、しかる後、他人を教えよ。かくして智者は煩いなし。」

「他に教ゆるごとく自らなせ、自らよく調御せば、他をも調御す。己を調うるは実に難し。」

〔法句経〕 一五八(九)

教師は児童生徒と心をつつにすると共に、超越して高い次元に立ち、見下すことなく忍耐と慈悲の心を持って接するべきで、未熟な児童生徒と同一次元にとどまり、彼らの言動に激怒したり憎悪敵対し、まして暴力を振るうようなことは絶対にあつてはならない。

「怒らざるをもつて怒りに打ち勝ち、善をもつて悪に打ち勝ち、施をもつて物惜しみに打ち勝ち、真実をもつて偽りに勝て。」

〔法句経〕 二二三
「この世では怨みは怨みによって静まることなし。怨みを捨ててこそ静まるなれ。これぞ不変の真理なり。」

〔口を制御し、説くところ聡明にして、高ぶらず、事実と理法とを説き明かす修行者の言葉は快し。〕

〔同〕 三二六(三)

粗雑な言葉は使わず、穏やかに事実と理法を、正語をもつて語る。ことよつてのみ、教師は児童生徒の心をつかむことができるのである。児童生徒の仕付けのなさや道徳的欠陥や過失を吹聴し、何事も生徒や親のせいにして、生徒の道徳的欠陥や過失を指摘し訓戒あるいは説教するだけでは、児童生徒や親たちの反撥や憎しみをかうのみである。

「他人の過失は見やすけれども、己の過失は見難し。他人の過失は箕でもみ殻をあふり出すごとくあげつらうが、己の過失は、狡猾な博徒が不利なさいころの目を隠すがごとくす。」

〔同〕 二五〇

教師は児童生徒の道徳的過失や欠陥を発見し指摘して導くことは大切であるが、その前にまず自らの言動を深く反省し、自らの過失や欠陥を自覚し正すよう努力すべきである。

しかし青少年の心の荒廃の問題の責任はすべて学校と教師に押し付けられ、教師たちが厳しい管理と親やマスコミなどの非難攻撃にさらされている現代、教師たちが何よりもまず身につけるべきは強い精神力、勇気と忍耐力、そして不当な圧力や非難への抵抗力と発言力である。さらには教師は大乗仏教の根幹をなす菩薩道を歩む修行者、すなわち上求菩提下化衆生、自覚覚他覚行円満を目指す布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禅定波羅蜜、智慧波羅蜜の実践者である菩薩となる覚悟が必要であろう。

おわりに

「旅人が舟も橋もない大河に直面した時、木々を集めて筏を組んで対岸に渡ることができたでしょう。喜んだ旅人が役に立った筏を担いで旅を続けたとすれば、このことは適切なことであろうか」「世尊よ、然らず」「そうだ、例え役に立った筏でも用が済めば捨てていくのが妥当であろう。そのように私の説いた法もまた解脱して用が済めば捨てるがよい。いわんや非法おや」

〔中部経典〕一・一、二二「蛇喩経」抄意識

このように釈尊は自分と自分の教法を絶対化せず、信仰を強制することなく、自分がさとり実践し教へ広めた法をも用が済めば「捨てよ」と言い、「すべて語った、教師に握拳なし」「私を頼らず、私の死後は自己と法を灯とし鳥とし拠り所となして、他を灯とし鳥とし拠り所となすなかれ」と遺言している。このことは人間教育において教師たる者、教育行政に携わる者、そして親たる者が特に釈尊より学び、銘記すべきことであろう。

現代の教育界の混迷と退廃は、無常・無我、縁起・無自性・空の真理を忘れ、あるいは無視して、妥当性を喪失した固定観念や価値観や社会構造を絶対化して固執し、「空」なる未来への存在である子どもたちに、押しつけ信じさせ閉じ込めようと強制し管理支配して服従させようとするところに、その根本的な原因があるのではなからうか。教育の使命は大人たちを乗り越えて、自分たちの未来を切り拓く力を持った子どもたちを育てることにある。学校教育は子どもたちを管理支配する道具に成り下がってはならない。

聖徳太子以来、わが国において仏教は多くの精神的指導者、「心の教育者」を輩出し、民衆の心の陶冶教育に多大に貢献し、日本人の心の拠り所となってきた。現代の葬式法事観光に専念する寺院仏教に惑わされ、迷信だと軽蔑排斥することなく、釈尊本来の人間教育として

の仏教に着目し、学び研鑽し大いに活用することが、精神的に退廃混迷している現代、教育に携わる者にとつて特に重要ではなからうか。

〔文 献〕

- 高楠順次郎監修「南伝大藏経」 全六〇巻七〇冊
大藏出版株式会社 一九七〇
- 増谷文雄訳「阿含経典」 全四巻
筑摩書房 一九七七
- 中村 元訳「ブツダの真理のことは 感興のことは」
岩波文庫 一九七八
- 田路 慧著「人間と道徳」
西日本法規出版 一九八八
- 田路 慧編「人間と現代」
西日本法規出版 一九九四
- （本論は平成一〇、一一年度科研共同研究「道徳教育の学的基礎付けに関する研究」(C・一〇六八〇二六八)の研究成果の一部である。記して謝意を表したい。)

一九九九年十一月 一 日受付
一九九九年十二月二十二日受理